OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Middle English Amis and Amiloun と Anglo-Norman Amis e Amilun についての一考察
Author(s)	福井, 三奈子
Citation	Osaka Literary Review. 1970, 9, p. 31-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Middle English *Amis and Amiloun* と Anglo Norman *Amis e Amilun* についての一考察

福井三奈子

序

Ami と Amiloun の物語は中世紀に於て広くヨーロッパに流布していたと言われる folk-tale の 'Two Brothers' がその基となっている。[1] この物語は聖徒伝として纏められたものと，Amis と Amiloun の友情の理想の姿をロマンティツク[2]に歌い上げたものとがある。二人の主人公を聖徒として扱う hagiographic versions は多く現存するが，romantic versions として現在残っている稿本はラテン語のもの，中世フランス語のもの，中世英語のもの，アングロ・ノルマンのものなどで，7篇である。この中で1200年頃書かれた Anglo-Norman version と，1330年頃[3]と推定されている Middle English version は物語の構成が密接に類似している。その理由はこの二つが，現在は残っていないが1200年より以前に書かれた，多分アングロ・ノルマンの「アミとアミロン」物語を共通の原典としたらしい事による。[4]

ME version は AN version の，つまりは adaptation であり，この二つのストーリーは酷似しているのであるが，AN の *Amis e Amilun* が当時プランタジネットモ家の人々を中心に生活していたイギリスに於ける上流階級を主として読者，聴衆として書かれてあるのに対し[5]，ME の *Amis and Amiloun* は14世紀庶民の間で流行した大衆向きの12-line, tail-rhymeの語り物であった[6]から，読者，聴衆の階層のちがいによる所のそれぞれの好みの違いは物語の性格的な差異となって判然と現われてい

る。翻訳に近いとは言えMEはANのロマンスを当時のイギリス大衆の好みに合う様に作り替えてある。 AN version には当然の事乍らイギリスに王朝を築き上げた人々が祖国から彼等の言語と共にイギリスへ持ち込んだフランス風の esprit が溢れているし，ME version にはイギリスの大衆が先祖から受け継いだアングロ・サクソンの精神が流れている。然しMEの *Amis and Amiloun* はアングロ・サクソンのOEの世界からは最早脱皮したものである。そしてOEとは異質の世界からの影響を受け乍ら14世紀のイギリスに生れて来ている。此のANとMEの「アミとアミロン」物語を並べて考察すると，ノルマン王朝確立以来移入されて来たフランス風ロマンスをイギリス人大衆は時を経てどの様に吸収し，彼等の好みに合わせて取捨選択を行い乍ら自国のものへと消化して行ったかその過程の一端を明らかにする事が出来るのではないかと思われる。即ち此等を比較すると，フランス好み及びイギリス好みの筋の運びや表現の差異などが明瞭に浮かび上って来る。仝時に又，フランスのロマンスの影響による所の，従来のイギリスの英雄譚の伝統にはなかった雰囲気をMEの物語に窺い知る事が出来るのである。Amis と Amiloun という二人の主人公のたぐい稀な友情の描写において，又ロマンスというgenreの中でクローズアップされて来た女性の描写において，Anglo Normanの *Amis e Amilun* が，大衆向きの ME の *Amis and Amiloun* へと変貌をとげる様子を，ANとMEを対照して調べてゆきたい。厳しい試練を経ても，全くゆるがぬ'誠の友情'が主題となっているこれらの物語の概略を次にしるしておく。

Summary of the Story

Lambardy に住む二組の男爵夫妻のもとに双生児の様に良く似た男の子がそれぞれ仝じ日に生まれた。この子供達は人に抜きん出て美しく，一人は Amis,

もう一人は Amiloun[7] と名付けられた。時が来て彼等は仝じ主君[8]につかえる事となる。又とない仲の良い友達になって兄弟の誓いを立てた二人は並ぶ者なき立派な騎士に成長する。やがて両親を失くした Amiloun は主君のもとを辞して先祖の領地へ戻る。かねがね二人の仲の良さを妬んでいた家令頭は，含む所あって Amis に見せかけの友誼を申し出るが断わられる。美しい立派な騎士様だと人々の口に誉めそやされている Amis は主君の息女に恋される。この二人の仲を知った家令頭は早速あるじに注進に及ぶので Amis は姫の面目を保つ為に白を切って決闘裁判で戦わねばならぬ。彼は神の前に潔白を誓って決闘にのぞむ自信がない。思い余って Amis は，今は奥方を迎え領主となって立派に彼の地に暮している親友の Amiloun をひそかに訪ねる。Amiloun は主君の姫に対しては晴天白日の身であるから友の身替りになってやろうと申し出る。二人は衣服を変えて Amiloun は決闘に臨むが誰も身替りとは気付かない。Amiloun になりすました Amis は友の領地へ赴き，Amiloun の帰国を待つ間，白刃の剣を毎晩友の妻と自分との間に置いて眠る。決闘場に向かう Amiloun に天の声が聞こえ，天罰として三年のうちには醜い癩病になるであろうと告げる[9]。然し彼は友情を裏切る事を潔しとせず，天罰を覚悟で一騎打にのぞみ，首尾よく家令頭を打ちとる。

Amiloun は事実を姫にうちあけ，ひそかに帰国して Amis と入れ替わる。Amis はその後主君の息女[10]と共に幸せに暮すが，一方 Amiloun は天罰の癩病となり遂には妻に領地から追い立てられる。彼は忠実な一人の従者と共に流浪の果てやつれ衰えて Amis の領地へ辿着く。Amis にはこの醜い癩病の乞食が彼の無二の友とは思いも寄らぬ。Amis と Amiloun の二人だけが所持している筈の友愛のしるしの金の酒杯を癩病やみの乞食が持っている所から Amis はてっきりこの乞食が盗みを働いたものと思い立腹して刀に手を掛ける。その時，何時迄も Amiloun を見捨てずに誠を尽して付添っていた従者の Owaines[11] が癩病患者こそ Amiloun であると Amis に告げる。Amis は驚愕し，嘆き悲しみ友を城に請じて手厚く看病する。或る晩 Amis の夢の中に天使が現われ，Amiloun の病気を治すには Amis の二人の幼児を殺してその血で病人を潔めるのがよいと彼に告げた。Amis は苦悩するが遂に子供を殺してその血で親友を浄める。Amis の妻 Belisaunt は夫より話を聞いて Amis の無二の親友の命を救う為であったのならと納得する。Amiloun の癩病は癒える。そして殺された

子供達は翌朝何事もなかった様に目を醒ました。Amiloun は領地へ戻る。彼の悲情な妻を石牢へ閉じ込めて，最後迄あるじに忠誠を尽した Owaines を国の領主にし，Amis と Amiloun は共々その後しあわせに暮す。二人は仝じ日に亡くなり仝じ墓に葬られた。

ANの作品は1250行，ロマンスの定形の octosyllabic couplet で書かれてある。MEは2508行で14世紀に流行した12行の tail-rhyme stanza の形を取っている。iambic four-stress couplet でANと比べて詩行が長い。長いのは物語の経過を順序立てて説明する意向で，ANには見られない passage をつけ加えたり romance cliché の紋切り型成句を補足に使って説明を重複させたりしているためである。

さてANもMEも共にロマンス[12]であるが，此等は純粋なロマン・クルトワ[13]とは言えない。宮廷風恋愛物語では当然男女間の恋愛に重点がおかれるがこの作品は Amis と Amiloun の友情が問題となっている。それは広く heroic age に共通するものゝふの友情であって，MEではゲルマン的なアングロ・サクソンの武将の世界に於ける社会倫理に基いた友情の解釈がなされている。癩病になった Amiloun を見捨てずにまことを尽す Owaines はMEに関しては 'his soster sone' (*l.* 1628) である。我々は此処でただちにゲルマン民族に古くから伝わっている，タキトス[14]の言う所の comitatus の関係を思い浮かべる。ベオウルフをたゞ一人最后迄見捨てぬウィーラーフのことなども。Comitatus は主と従の縦の関係だけに成立つのではなく主君に忠誠を誓い合った家臣達の間にも成立した。Amis と Amiloun の関係がそれである。一度友情の誓を立てた暁はその約束を全うする事こそもののふの誉，というアングロ・サクソンの美徳の観念を民族の精神に受継いで来ているMEの作者はANの Amis と Amilun の友情物語を自国語に訳す時これを彼等の精神的な伝統の上から親しく理解出来るものとして解釈した事であろう。

ゲルマン民族の色彩の濃いノルマンディに於てもこの comitatus の関係は Anglo-Saxon の武士達の社会と同質のものが存在した様子である。[15] 一人の主に仕える従者達の間で誓約を交した関係を compagnonage とか amistie とか呼んで，これは1対1の特別な友情関係であった。*Amis e Amilun* の中にこの特別な友情を現わす言葉 'amistee' (*l.* 127) が出て来る。それは悪だくみを以て言い寄る senescal の友情を Amis が断わる場面である。この様に Anglo-Norman の作者も *Amis e Amilun* を友情物語のロマンスに仕立て乍ら，Roland と Olivier の友愛の姿を彷彿とさせる武勲詩 chanson de geste の伝統的な雰囲気を存分に挿入れてそれに女性との恋愛をからませ，貴族の宮廷生活を描き出している。

つまり此等の作品は AN では武勲詩と roman courtois の性質を兼ね具え，ME では OE の heroic poetry の伝統とフランスから渡って来たロマンスの要素を混用していて一つの文学的嗜好変遷期の現象をあらわしている。ではこの AN と ME を較べ乍ら，一見断絶しているかに見える OE 英雄詩と ME ロマンスの世界がどの様に実は連続しているかを探り，イギリスの民衆には元来異質のフランス的要素が漸次彼等に受け入れられて行くその過渡期の様相の一端をテキストから調べてみよう。

I. Remnants of the old alliterative poetry

ME の物語は伝統的なアングロ・サクソンの英雄のイメージを以て Amis と Amiłoun を紹介する。彼等は 'douhtiest in eueri dede, / Wiþ scheld & spere to ride on stede, /Þai gat hem gret renoun,' (ME *ll.* 178–180) 何をやらせても豪胆で楯と槍を手に馬を御して，彼等は誉の名を挙げた。Wiþ scheld & spere という alliterative formulæ は，過ぎし日モルドンの戦いに楯を上げ槍をしごいて，敵に立ち向かった OE 詩の英雄の武者振り 'bord hafenode, /wand wacne æsc' (*Battle of Maldon, ll.* 42—43) を想い出させる。敵役の家令頭は Amiloun の言う所によれば 'fals steward'

(ME *l.* 311) であるが，彼は奸智にたけた佞臣というより 'A douhti knigt at crie,' (ME *l.* 207) 勇ましい騎士で 'þe steward was michel of migt,' (ME *l.* 868) 腕っぴしが強く相手にっては不足のない敵の姿をしている。michel of migt という成句は *Beowulf* に現われる Hrothgar の弁者 Unferth を連想させる。

Amiloun は先祖代々の領地へ戻った後，'a leuedy brigt in bour' (ME *l.* 334)を娶る。この言葉からも我々は OE の形容句 'beorhte mægþ'(*Judith*, *l.* 254) や 'goldhroden' (*Beowulf*, *l.* 614) を想い浮かべるのではなかろうか。Amis を恋する主君の息女にも 'a douhter fair & bold' (ME *l.* 422) だとか '··· hende & fre'(ME *l.* 423) とか，OE に於て位高き女性に使われた形容詞が用いられている。fair＜fæger ; bold＜bald ; hende＜gehende ; fre＜freo. この様に ME のロマンスは，多分に，OE の heroic poetry に現われる伝統的な主人公のイメージを継承した hero,[16] heroine を中心に展開してゆくのであるが，この伝統的なイメージに，外来語や，表現手段，表現形式等のフランスの要素がどの様につけ加わって来ているのかそれを次に見てゆこうと思う。

Ⅱ. French Elements

A.

Þat riche douke, þat y of told,
He hadde a douhter fair & bold,
Curteise, hende & fre.
When sche was fiften winter old,
In al þat lond nas þer non yhold
So semly on to se,
For sche was gentil & auenaunt,

Hir name was cleped Belisaunt

ME *ll.* 421—428.

先に述べた公爵の姫 Belisaunt の描写である。彼女に対する形容詞は fair, bold, semly, hende, fre の他に curteise, gentil, auenaunt と Old French からの言葉が混入している。形容に外来語を併用する事によってアングロ・サクソンの伝統的な姫の姿は異国のロマンスの姫君の雰囲気と重なり，此処には美しい複雑な混血のイメージがみられる。Amis と Amiloun の肖像は前項にのべた様に OE 風であり，形容も gode knigt や hende knigt を使っているがそれが全てではない。外来語の curteys はほんの三回テキストに現われるだけだが，gentil は þat gentil knigt の句となって，þat hende knigt と同等の頻度で使われているのがみられる。

ロムバーティの公爵の館に於ける祝宴を描いた場面は外来語を使っているために大層華やかになって来た。

With meet and drynke, meryst on mold
To glad þe bernes blipe,
Þer was mirþe & melodye
& al maner of menstracie

ME *ll* .101—104.

この場にはもうアングロ・サクソンの武者共が集まって戦の手柄話に花を咲かせた 'medoheal' (*Beowulf, l.* 484) の俤はない。Bernes の語に曽て mead-hall で盃を手に声を張り上げて誓いの言葉をのべた warriors の姿を瞥見するが，此処からは OE の社交場の生真面目な雰囲気は消えてしまっている。OF melodie＜melodye ; AN manere＜maner ; OF menestralsie＜menstracie を挿入れて中世フランス風の賑やかな宮廷の趣がほのみえる。

B.

Amis と無二の親友 Amiloun が別れる所，別離の場面は ME には外来語の使用はないが，OE には見られないフランス的表現を使った場景描写がある。AN を参照すると次の如く，Amis と Amilun は別離を悲しむ余り気を失って倒れてしまうのである。

Atant se sunt entrebeisez,
Pleurent e crient de pite,
....
Paume se sont chauz a trre.

AN *ll* .101—102, 105.

MEの二人もANと全じ様な愁嘆場を見せる。Amis の心は悲しみに満ち悲哀と苦悩と痛ましい嘆きの為に高潔な Amis は殆んど気絶するのであった。

Sir Amis was so ful of care,
For sorwe & wo & sikeing sare,
Al-mest swoned þat fre.

ME *ll*. 256—258.

ロマンスの中の騎士や姫君は常套手段のように気絶をする。chanson de geste の武将達も激しい感情の昂揚に最早耐えられなくなった時は，ばったりと気絶した。Roland も親友の Olivier の死に直面して何度も気を失った。Charles (Charmagne) も甥の Roland の屍の上に失神する。「悲しみの極みに意識を失って倒れる」という表現はフランス好みの独特の言いまわしであった様だが，これはロマンスの移入と共にイギリスにも好んで摂入れられた表現となった。ME はこの場面，頭韻を使い OE の名残りの強い言葉を選びながら上述のフランス風な表現を用いてセンティメントに於てはロマンスの雰囲気を上手くとり入れていると言えるであろう。

C.

武勲詩やロマンスの中で例へば「人が集まった」と言う時具体的にあの人も来た，この人も来た，と言葉を羅列して楽しむフランス風な表現形式があるがこの形はMEの *Amis and Amiloun* にもまた，摂入れられているのが見える。その一つは Amis の結婚の祝宴に集まった人々の描写である。

Tuz i vindrent, petiz e grant,
Les barons e les chevalers,
Burgeis, serjanz e esquiers.

AN *ll.* 698—700.

Miche was þat semly folk in sale,
Þat was samned at þat bridale
When he hadde spoused þat flour,
Of erls, barouns, mani & fale,
& oþer lordinges gret & smale,
& leuedis briȝt in bour.

ME *ll.* 1513—1518.

ANの如く Erls, barouns, & oþer lordinges, & leuedis と並べたてる文体を使いその上にMEはフランスのロマンスに使われる cliché とも言うべき成句の形を沢山摂入れている。MEの grete & smale は丁度ANの petiz e grant を翻訳した形である。OE poetry の half line に feorran ond nean (*Beowulf*, *l.* 839) や，geongum ond ealdum (*Beowulf*, *l.* 72) などの説明的な formula は使われていたから，この口調に類似する romance cliché は抵抗なく摂入れられただけでなく，かえって不断にMEロマンスに使われるようになったのであろう。'Grete & smale' とか 'pore ne ryche' (ME *l.* 92) とか対照的な言葉を組み合せる時もあるし，'briȝt in bour' の様に頭韻を踏んでいる時もある。又，イギリス大衆にはおなじみの頭韻を使いながら 'tour & toun'

(ME *l.* 174) の如く外来語の tour<OF tor を何気なく混ぜて自国語に吸収して了うのも言語の変遷を滑らかに迎える一つの大衆的な知恵であったのではないか。

以上これまで見て来た所によると，ME の物語は全体としてはイギリス個有の伝統的な主人公のイメージからさして離れぬ形容を用いながら（第Ⅰ節），所々に形容の際の外来語，状況描出の際の外来語（第Ⅱ節A）をとり入れ，フランス風な感情を表現する場面や（B），フランス的な文体，romance cliché の外来語（C）等を移し入れて外来要素の自然な吸収を行っていることが明らかにされて来た。次の第Ⅲ節では物語の流れを追ってANとMEにおける叙述の類似がどのようなものかをたどってみよう。

Ⅲ. Parallelism between ME & AN versions

先にこの二つの物語は構成が全く似ていると述べて来た。では具体的にどの程度の類似であるのか此処にANとMEを並べ比べてみる。

下に掲げるのは Amiloun になり 済ました Amis が知らぬ顔で故国へ戻り親友の妻と臥所を共にする場面である。

Amis, kant il ennuita,
Lez la dame se coucha.
S'espeie nue entre eus posa;
La dame de ceo s'enmerveilla.

AN *ll.* 537—540.

& whan þai were to-gider ylayd,
Sir Amis his swerd out braid
& layd bitvix hem tvo.
Þe leuedi loked opon him þo
Wroþlich wiþ her eiȝen tvo,

ME *ll.* 1162—1166.

此の個所では物語の叙述は全じ様に進んでいる。MEはANを其儘翻

訳している様だが，MEに見られるAmilounの奥方は反応がきつい。ANの奥方はそのこと（白刃の剣を二人の間に置いたこと）に驚いただけだがMEの夫人は怒って Amis を睨んでいる。

Amis にとり代わった Amiloun が決闘裁判の場で家令頭と一騎討をする所はAN，ME共に物語の一つのクライマックスであって，MEは65行ANは83行を割いて克明な描出を行っている。

Le senescal ke nel peut amer
Un grant coup li va doner
Amunt el healme peint a flurs,
Ke tost abati les colurs.
Sur le senestre le coup descent,
Mailles trencha plus de cent.
Bien pres li passa del coste,
Mes el char nue ne l'ad touche.
Amilun, ke fud de vigour,
Maint coup li dona le jour.
La bataille ad bien dure,
Deske noune fust passe.
Le senscal le fist mult bien,
E Amilun nel dout de rien.

AN *ll.* 631—644.

So hard þai hewe on helmes brigt
Wiþ strong strokes of michel migt,
Þat fer bi-forn out stode ;
So hard þai hewe on helme & side,
Þurch dent of grimly woundes wide,
Þat þai sprad al of blod.

Fram morwe to none, wiþ-outen faile,
Bitvixen hem last þe bataile,
So egre þai were of mode.

ME *ll.* 1312—1320.

両雄互いにゆずらず死闘を続ける二人の胄から鮮血が飛び散り熱戦は九つ過ぎ迄休みなく続く。 So egre þai were of mode... MEには当然の事乍らアングロ・サクソンの heroic poetry の雰囲気が横溢し，一方ANには武勲詩の剛勇の武将の活躍をしのばせる情景が描かれている Le senescal le fist mult bien, / E Amilun nel dout de rien. が然し此等には緊密な類似がみられる。描写だけではない。W. P. Ker のいう[17]所の英雄詩，武勲詩がかもし出す精神の類似がある。

Amiloun が穢ない乞食の姿に変り果てゝ Amis の領地へと 流浪する。Amis が激怒して手にかけようとしたその乞食こそ且て危急を救ってくれた無二の親友 Amiloun であると 判明した時の Amisの驚愕，嘆きの場面を対照すると再び AN と ME の situation には同様な展開が認められる。

E / quant le conte ceo oi,
Tot a terre estendu chei,
Bat le coupe, ses chevus tire,
Sa vie het, sa mort desire,
...
Trestuz pleurent de pitee,
E Amis atant s'est drescie,
E Amilon ad acole ;
Plus de cent fez li ad baise,
Tut si com il fud enboe.

AN *ll.* 1043—1046,
1051—1055.

He fel aswon to þe grounde
& oft he seyd, "Allas þat stounde!"
...
For he saued mi liif biforn,
Ichaue him ȝolden wiþ wo & sorn
& wrouȝt him michel wo.
"O broþer." he seyd, "par charite,
Þis rewely dede forȝif þou me,
Þat ichaue smiten þe so!"
& he forȝaue it him also swiþe
& kist him wel mani a siþe.
Wepeand wiþ eiȝen tvo.

ME *ll.* 2134—2135,
2140—2138.

この場合，場面は仝じ愁嘆場であるが， MEは Amis の痛哭の独白を入れ，Amiloun への語りかけの言葉を入れている。ANの叙述をMEに移す時MEでは屢々会話体が使われる[18]。会話体によって写実的な，いきいきとした描写を意図したのであろうか。引用のANには会話はないがその描写には深い迫力がある。癩病でやつれた乞食が Amilun だと気付いた Amis は驚愕の余り地に倒れ伏してしまう。身体を打ち髪をかきむしり．我身をいとい，我身の死を望む。悲嘆の涙にくれながら起き上り Amilun をまるで狂った様に抱きしめ何回となく抱擁する。AN version は昂揚した感情を極めて生々しく巧みに描出する。引用で明らかなようにMEは成程ANのストーリーは移した。しかし心理描写の深さはAN個有即ちフランス風の特徴であって，それはたとえ写真的な会話体を以てしても ME には移し取れなかったテクニックであるようだ。

Ⅳ. Characteristic Differences of the Two

ANとMEの物語の構成および叙述の類似については前節でのべて来た。この節ではANとMEが各々その特徴を現わしている所，即ち二つの稿本の間で目立って相異のある個所を取り上げてみる事にする。それはイギリス大衆に受けるようにMEの作者が所詮は異質のものであったANのロマンスを自分達の好みの方向へ変化させた個所であると言う事も出来るであろう。

MEでStewardがAmisに友誼を持ちかけてくる所がある Amisは Amilunに対する友情を守り，友に真実でありたいと思うし誓約にそむけば全く私の立場はなくなる，他の誰とも彼を変えはしない，と答える。

...“Mi treuþe y pliȝt
To sir Amiloun, þe gentil kniȝt,
....
Y no scal neuer mi treuþe breke,
Noiþer for wele no wo.
....
Y schal be to him trewe ;
& ȝif y were now forsworn,
& breke mi treuþe y were forlorn,
Wel sore it schuld me rewe.
Gete me frendes whare y may,
Y no schal neuer bi niȝt no day
Chaunge him for no newe.”

ME *ll.* 367—368, 371—372, 378—384.

すると家令頭は憤慨して真正面から，今日この日から私はお前の敵だときめつける。

Þe steward þan was egre of mode,
Al-mest for wretþe he wex ner wode
& seyd, wiþ-outen delay,
& swore bi him þat dyed on rode :
"Þou traitour, vnkinde blod,
Þou schalt abigge þis nay.
Y warn þe wele," he seyd þan,
"Þat y scal be þi strong foman
Euer after þis day!"

ME *ll.* 385—393.

ここで正々堂々と宣戦布告をする steward は男らしいと云えるかも知れないが，いづれは裏切の悪だくみをすることになる ME の家令頭の性格は余りにも単純に描かれている。AN にみられる陰険さは ME にうつし取られていないのである。

この場面を AN と比べると ME の Amis の答えも（ME *ll.* 378, 383—384）単刀直入で曲がない。AN の Amis は言う...私は Amilun を大層愛しているから何びとのためであれ彼を見捨てはしない，しかし御信頼頂きたい，貴殿が私を必要とされる時は喜んでお役に立ち，お互いの面目を全うしましょう。

"...
E jeo l'eim bien e amerai,
Pur nul autre ne le lerrai.
....
Mes de tant me poez crere,
Ke si vus aiez de moi afaire,
Jeo le vus frai a grant docur,
Sauve cheseuni honur!"

AN *ll.* 133—134, 137—140.

AN の Amis の言葉は柔かい。それに対して senescal は自制するが，口惜しさの苦悶で顔面蒼白になる。そして機会があり次第仕返しをしてやろうと心に決める。デリケートな心の綾を AN はここに描き出しているのがみられる。

Le senescal atant se tint
E d'anguisse palle devint,
Purpense k'il se vengereit
Si tost com sun liu verreit.

AN *ll.* 141—144.

Amis は無下に家令頭を斥けもせず言いつくろうのだが，家令頭の方はまっさおになってひそかに復讐を企てる。この微妙な心の動きは MEに比べて AN がはるかに複雑である。深い心理描写になると ME は ANに及ばず，稚拙さがみえる。心理を突込んで描出するよりは直情径行型の理解し易い人物のイメージを当時のイギリス大衆は好んだのであったろうか。

この物語のクライマックスの一つに恋わずらいをした主君の息女が Amis に言い寄る場面がある。伯爵が伴を連れて狩に出掛けた留守に AN の Florie は，やかたに残っている Amis の部屋の押しかけてゆき，思いのたけを打ち明ける。

...une soule chambrere
Ala par conge de sa miere
Parlar a Amis, k'ele ama ;
Tant parla, tant i demora,
Ke tot sun corage descovri
E diht ke pur l'amur de li
Morreit, s'il n'euht de li pite
E k'ele fuht de li amee ;

Kar si de li l'amur n'aveit,
James, ce dyst, home n'amereit.

AN *ll.* 253—262.

MEは此処で少し場景が違う。恋の病に臥つていたBelisauntは母親にすゝめられて侍女達と夏の庭へ気ばらしに出る。そこで気分が優れぬため狩に出かけずにいたAmisと果樹園でばったり逢うのである。Belisauntが愛を告白する背景となる夏の庭は美しく叙情を以て描かれている。自然の厳しさや美さを背景に人の感情を唄い上げるリリシズムは，アングロ・サクソンのいにしえよりイギリス人の心ではなかったか。

Vp hir ros þat swete wiȝt,
In-to þe gardine sche went ful riȝt
Wiþ maidens hende & fre.
Þe somers day was fair & briȝt,
Þe sonne him schon þurch lem of liȝt,
Þat semly was on to se.
Sche herd þe foules gret & smale,
Þe swete note of þe niȝtingale
Ful mirily sing on tre;
Ac hir hert was so hard ibrouȝt,
On loue-longing was al hir þouȝt,
No miȝt hir gamen no gle.

ME *ll.* 529—540.

ANにはMEの夏の庭の如く愛を告白するにふさわしい背景は現われて来ない。恋のために食物ものどへ通らぬFlorieは機会をみていきなりAmisの部屋へ出むく筋書きになっている。ANでは話をすすめるに周囲の状況を先づつくり出す事よりも，むしろ人の心の動きを主体にして物語を展開してゆくさまがはっきりとこゝに見受けられる。

"Sir knizt, on þe mine hert is brouzt,
Þe to loue is al mi þouzt
Boþe bi nizt & day.;
Þat bot þou wolt mi leman be,
Ywis, min hert brekeþ a þre,
No lenger libben y no may.

"Þou art," sche seyd, "a gentil knizt,
& icham a bird in bour brizt,
Of wel heize kin ycorn,
& boþe bi day & bi nizt
Mine hert so hard is on þe lizt,
Mi ioie is al forlorn ;
Plizt me þi trewþe þou schalt be trewe
& chaunge me for no newe
Þat in þis world is born,
& y plizt þe mi treuþe al-so,
Til god & deþ dele ous ato,
Y schal neuer be forsworn."

ME *ll.* 571—588.

Amis から愛して貰えなければ死んでしまうと姫は AN も ME も最初はしおらしい。ME では Belisaunt が言う...貴方は誠実であって私を他の人と取り替えないと貴方の真実を誓って下さい。私もその様に致しましょう。死ぬ迄誓いに背きはしません... この 'plighting of troth' が彼女の愛の告白に続く key-note である。その点に我々は AN と ME との違いを認める。AN の Florie は ...貴方に愛して貰わなければ私はもう誰も愛さない... と言うのだが，誓約云々の言葉は其処に出て来ない。このしお

らしい姫君はしかし，Amis が返事をためらふと豹変する。

"Coment?

Este vus de ceo en marrement
Ke jeo vus ai done m'amur?
Ja en ma vie apres ceo jor
Ne serrai en mon quer haite,
Si jeo ne seie de vus venge!
Certes, or sui jeo bien honie,
Kant nem deigne3 aver amie:
Tant gentils hommes m'unt preie,
E jeo les ai tuz refuse.
Certes, n'estes pas chevaler,
Recreant estes e lanier.
Un plai bien dur vus bastirai
E a mon piere le conterai,
Ke vers li estes de moi forfet,
E serrez a chivals detrait,
Dunc serrai de vus bien vengie!"
A tant sest Florie tornee.
Amis estroit se purpensa,
L'un mal e l'autre mult dota,
Corteisement li respondi :
"Damoisele, *pur deu merci,*
Vostre ami sui e serrai
E vostre sergant tant com vivrai,
Mes vers vus ne mesprendrai mie,
Par quei vus eussez vilainie
Ne de vostre cors hontage :

De ceo prang deu en: tesmonage ;
Si ceo peut estre aparceu
Ke de moi feissez vostre dreu,
Ne serriez a la fin honie?"
"*Oshtez, oshtez!*" ceo dist Florie,
"*Nus le frum si priveement,*
Tuz nos biens e nostre talent,
Nel savrad home de miere ne!" 〔italics not in the original.〕

AN *ll.* 269—303.

...私が愛を捧げていますのに貴方はそれにうんざりしていらっしゃるのですか。私の心は貴方に報復をせずにはおさまりません。本当に思い人に承諾して貰えないなんてとても恥さらしですわ。身分の高い方々が幾人も私を所望でしたのに私は皆さんにお断りをしました。しりごみなさるなんて騎士様らしくもない。貴方に対するひどい侮辱を考え出してお父上に言い付けましょう。お父上にとっては貴方は私に罪を犯した人なのですから，貴方は馬で裂殺されるでしょうよ。そうすれば貴方に見事に復讐が出来ますわ... と Florie は腹を立てて Amis につめ寄る。AN のFlorie がしりごみをするなんて騎士じゃない 'Certes, n'estes pas chevaler' (AN *l.* 279) と Amis を誹謗するのに対し ME の Belisaunt は：

"...
Wheþer artow prest oþer persoun,
Oþer þou art monk oþer canoun,
Þat prechest me þus here?
Þou no schust haue ben no kniȝt,
To gon among maidens briȝt,
Þou schust haue ben a frere!
....

"Ac," sche seyd, "bi him þat ous wrouȝt,
Al þi precheing helpeþ nouȝt,
No stond þou neuer so long.
Bot ȝif þou wilt graunt me mi þouȝt,
Mi loue schal be ful dere abouȝt
Wiþ pines hard & strong ;
Mi kerchef & mi clopes anon
Y schal torende doun ichon
& say wiþ michel wrong.
Wiþ strengþe þou hast me todrawe ;
Y take þou schalt be þuroh londes lawe
& dempt heiȝe to hong!" 〔italics not in the orignal.〕

ME *ll.* 616—621, 625—636.

お説教などして貴方は坊様か，貴方は美しいおとめに囲まれる騎士ではなくて修道僧だったらよかったのに。私の愛を受け入れて下さらぬのならその報いをひどい苦痛で高価にあがなってもらいましょう。私は自分の被り物と着物を直ちに破って貴方が力づくで私をなぶりものにしたと言ってやりましょう。そうすれば国の掟によって〔貴方は〕高い所へ吊されることに決まるだろうから，と悪態を言う。豹変した Florie も Belisaunt もこれはどちらも恐ろしいけれど，Belisaunt は着物を破って偽の証拠をつくり，Amis を陥れようと意気込むなど全く積極的で粗野な所が目立つ。

AN の Amis は激しい怒りの言葉を浴びせる Florie に対して，騎士道精神を以て慇懃に答えている。

...姫様，有難く私は貴女様の友となり終生貴女様の召使いとなりましょう。しかし間違いをなさって御自身にきずをつけてはなりませぬ。(AN *ll.* 290—292) 高貴の婦人の召使いとなり婦人の名誉を守るというこの騎士道

精神は, *Sir Gawain and the Green Knight* の Gawain と緑の騎士の奥方との対話には充分摂入れられている精神[19]であるが, それはまだこの ME version にはみられない。その様な表現 (AN *ll.* 291—292) はまだ大衆に理解されぬか, 或いは好まれぬ esprit courtois であったのだろう。ME の Amis は, 身分の違う者を愛する罪は神を怒らせ, 主君には邪まな裏切者となるのだから その様な事はなりません と真面目に Belisaunt を説得しようとする :

"& ȝif we schuld þat game biginne,

....

We schuld lese, & for pat sinne

Wretþi god þer-to.

& y dede mi lord þis deshonour,

Þan were ich an iuel traitour ;

Ywis, it may nouȝt be so.

Leue madame, do bi mi red

& þenk what wil com of þis dede :

Certes, no þing bot wo."

ME *ll.* 601, 605—612.

Belisaunt はこれに対して貴方の御説教は役に立ちません と怒りをぶちまける。(ME *l.* 625) AN の Florie を熟知の上で ME の作者は Belisaunt を描いたのであろうが, 夏の庭という愛の語らいにふさわしい優雅な背景を折角新しくつけ加えたのにかゝわらず Belisaunt は ...私の被り物や着物を破って... などと荒々しいことを具体的に言い出して淑女のイメージにはそぐわないちぐはぐさを我々に感じさせる。ME の作者, 或いは大衆は AN の女性より荒々しい女性像を好んだのかとも思われる。

AN の Amis が ...私を貴女様の恋人に なさるという事は つまりは恥では御座いませぬか... (see AN *ll.* 298—299) と言うのに答えて Florie は

...私達は誰にも知られぬ様にひそかに愛しましょう。(see[AN] *ll.* 301—303) と提案する。そしてこれを Amis は承諾する。この考え方は高貴な婦人と騎士との密やかな恋という amour courtois のパタンであるが ME ではそうはならない，此処にも又 AN と ME の相異がみられる。

ME の Amis は地位も財産も Belisaunt に相応しくないからと求愛にしりごみする。けれ共それでは私がそれを都合しましょうという Belisaunt の言葉によって彼女を抱擁する。

"....
Whi seystow euer nay?
No be þou neuer so pouer of kinde,
Riches anouȝ y may þe finde
Boþe bi niȝt & day."
Þat hende kniȝt biþouȝt him þan
& in his armes he hir nam
& kist þat miri may ;

ME *ll.* 759—765.

彼は対等の立場を約束されて初めて納得し，彼女の愛を受け入れる。OE の世界では高貴な男女の間柄はまづ身分の釣合が肝心であった。ロマン・クルトワの出現で貴婦人は恋する騎士に君臨する様になり，騎士は意中の婦人のしもべとさえなるのであるが，ME version にはいまだ精神的に OE の世界が存続している。

この求愛の場面，洗練されたロマンスの女性と騎士のイメージは ME に登場しないのである。ロマンスであり乍らその精神的風土に OE の世界の色彩が濃いのはこの ME 作者の独自な特徴であったのか，或いはそれは一般大衆の好みであったのか。直情径行的な北方タイプの heroines[20] や直面目一途で実直な heroes が尚一般に人気があって，ロマン・クルトワの sophisticated な貴婦人や騎士の姿に14世紀当初のイギリス大衆は親しみ

を感じなかったのではないかと思われる。

Amiloun が両親の領地を相続するために主君にいとまを貰い親友 Amis と別れる場面，ME に見られる Amiloun の言葉の中で一番重要な keynote になるのは 'trewpe-pliȝt' である。彼等は誓い合った仲だから，お互いが真実であれかしと念を押し，主君との誓いに背くなと Amiloun は Amis に忠告する。

Sir Amiloun, þat hendi kniȝt,
Was riȝt-wise man of rede
& seyd to sir Amis ful riȝt,
"Broþer, as we er *trewþe-pliȝt*
Bope wiþ word & dede,
Fro þis day forward neuer mo
To faily oþer for wele no wo,
To help him at his nede,
Broþer, be now trewe to me,
& y schal ben as trewe to þe, 〔italics not in the original〕
Also god me spede!

Ac broþer, ich warn þe biforn,
For his loue, þat bar þe croun of þorn
To saue al man-kende,
Be nouȝt oȝain þi lord forsworn,
& ȝif þou dost, þou art forlorn
Euer more wiþ-outen ende.
Bot euer do trewþe & no tresoun
& þenk on me, sir Amiloun,
Now we asondri schal wende.

& broþer, ȝete y þe forbede
Pe fals steward felawerede,
Certes, he wil þe schende!"

ME *ll.* 290—312.

このAmis と Amiloun の 'truth-plight は再び Amis が家令頭の友情の申の出を断る理由となった。

"*Mi treuþe y pliȝt*
To sir Amiloun, þe gentil kniȝt,
Þei he be went me fro.
Whiles þat y may gon & speke,
Y no schal neuer mi trèuþe breke,
Noiþer for wele no wo. 〔italics not in the original〕

ME *ll.* 367—372.

Where so he in warld wende,
Y schal be to him trewe ;
& ȝif y were now forsworn
& breke mi treuþe, y were forlorn,
Wel sore it schuld me rewe.

ME *ll.* 377—381.

AN の Amilun は Amis に家令頭の不誠実を警戒するように言い，主君を愛せよと言う。何故なら主君は我々を慈しんで下さるのだから ... Kar mult ad ame vus e mei!

"Amis," dist il, "beau compaignun,
Pur vostre honur merci vus cri,
D'une chose seiez guarni :
Le counte ad ceins un senescal.

Ke mult est fel e desleal,
E si est de grant parente ;
Pur ceo est il le plus doute.
....
Garde vuz de sa felonie
Ne aiez a li compaignie,
Kar ki s'acompaingne a felon,
Ne porra trover si mal nun ;
Kar pis ne poeit avanir,
Kant compaign vult autre trahir.
....
Amez bien vostre seingnur,
Ne suffrez k'il eit deshonur!
Mult li devom amur e fei,
Kar mvlt ad ame vus e mei!" 〔itarics not in the original〕

AN *ll.* 74—80, 87—92.
97—100.

この「愛」こそ Amis と Amilun の間に存在するものでああって ... 'Tant s'entreamerent durement', (AN *l.* 13) Amis が家令頭の友誼をしりぞける原因でもあり理由でもある。

"Sire senescal, vostre amiste
En mei n'ert pas si employe,
Ke jeo ne peusse un autre amer,
Kant talent me donne e voler.
Si Amilun s'en seit ale,
Son quer m'est tot abandone,
E jeo l'eim bien e amerai,

Pur nul autre ne le lerrai. 〔italics not in the orginal〕

AN ll. 127—134

ANに於いては Amis と Amilun の友情の存在する理由は二人の間に愛がある事によっている。ところがMEでは，勿論二人は愛情があるから友情の誓いを立てるのだが，ひとたび誓いを立てた後は誓いを守ることに重点がおかれて来る。ANでは「愛」が物語の中心なのだが，MEでは「誓約」を守る事こそ大切なのだ。これはANとME versions の大きな差であろう。

結　論

こうして見て来ると，以上ANとMEの「アミとアミロン物語」では，MEはANの構成をそっくりうつし摂りながら（第Ⅲ節参照）heroic age には広く OF と OE の世界に共通していた伝統的な hero のイメージをME のロマンスの園に描き出して（第Ⅰ節参照）OE と ME の世界をつなぎ合せ物語を展開して行ったと言う事が出来る。しかし ME のロマンスの雰囲気はアングロ・サクソン文学に比べると何としても明かるく軽妙である。それはOEの屈折語尾の脱落によって言語が synthetic language から analytic language の方向へむかったことも大きな原因であったろうが，MEロマンスの明かるさ，軽妙さは第Ⅱ節に指適したように，外来語の影響に負う所が大きい。騎士や貴婦人の容子には外来語の形容を OE 風の形容に混ぜ合わせる事によって exotic で優雅なイメージが新しくつけ加えられた。ME の女性像は AN と比べると洗練されていないけれどフランス風宮廷の貴族生活の有様は原典 AN の物語の構成を其儘うつしとっているMEに華やかな雰囲気で描き出されて来る。事実，当時のイギリス支配階級では，アンジェヴァンの明るくて賑やかな貴族生活が行なわれていた事であろう。その様な宮廷の賑やかな場面を強調する時には，ME version に外来語の豊富な使用がみられるのである。騎士達のデリケートな感情描出には，AN version にそのモデルがある所のフランス風表現が使われているし，ANの octosyllabic couplet に類

似する iambic four-stress couplet を用いて随所に OF ロマンスの文体や romance cliché を散りばめて，ME の *Amis and Amiloun* は明かるく軽快な文体とデリケートな雰囲気を持ったロマンスとなって誕生したのである。しかし heroes, heroins の OE 風イメージはさておくとしても，この ME の物語の底を流れている精神はアングロ・サクソンの OE 文学の伝統的な心をうけついで，全くイギリス的であったとは言えないであろうか。AN では Amis と Amilun の間に友情が成立するのは心の中に「愛」があるからである。ME では，ひとたび誓を立てた間柄は誓いに背いてはならぬという社会道徳の規範を基盤にして，その既成の倫理にひたすら忠実たらんとする Amis と Amiloun を描き出している。この様に規範を遵奉しょうと努めるのは，heroic age の英雄達が身を以て示したアングロ・サクソン文学の精神であった[21]。AN に比べて ME は心理描写の複雑さがないという事も OE 文学の伝統をひいているためと考えられはしないだろうか。OE 文学世界では，英雄，忠義な家臣，裏切者等それぞれの prototype があり，作品の登場人物はそのタイプにふさわしい行動や言語を以て描き出されていた。個人を描き乍らその個人の属するタイプ全体像に通じる prototype の人物を作り上げていた OE の世界では，個々の心理の複雑な綾を探る心理描写のテクニックが発達しなかったのは当然の事である。ME の Amis と Amilouu 及び彼等をとり囲む人達は善人は善人なりに，悪人は悪人なりに枠にはまった様な真面目一途な性格を持ち単純であり喜怒哀楽を直ちに表現し，行動にうつす直情径行型である。この様な性格，心情が14世紀の大衆に受けたのであれば，愛は人々にどの様な作用をするのか，愛を中心に把えてゆこうとする AN ロマンスのエスプリはまだまだ彼等には消化吸収出来ぬフランス的な異質のものであったのだろう。ME の物語は心の動きを追う事よりも話の筋が納得のゆく様に，ストーリーの枠組になる situation の設定に腐心しているのがみてとれる。「友愛」を主題とするアミとアミロン物語は，その主題の扱い方に AN version と ME

version の大きな差異が認められる。AN は愛そのものが中心の関心事であったが ME では友愛の誓いにどれ程忠実であるか，が物語の中心点となっている。其の点に我々は，ロマンスとして多分にフランスの影響を摂入れ乍らも ME version に受け継がれて行った，アングロ・サクソンの根強い伝統的な精神をみるのである。

日本英文学会中部支部第22回大会に於て昭和44年9月28日発表

註

1. Mac Edward Leach ed,, *Amis and Amiloun*, Oxford Univ. Press, (E. E. T. S.), 1960, p. lxxxviii.
2. *Ibid.*, p. ix. 'romantic' の解釈には see Dorothy Everett, *Essays on Middle Euglish Literature*, Oxford Univ. Press. 1955. p. 15.
3. *Ibid.*, p. xx., p. xc.
4. M. Dominica Legge, *Anglo-Norman Literature and its Background*, Oxford Univ. Press, 1953, p. 116. *Amis and Amiloun* (E. E. T. S.)の編者 Mac Edward Leach は問題の AN の *Amis e Amilun* と ME version 共通の原典は OF の *chanson de geste* の形であったろうと推定するが，*op. cit.* p. xxxii. 此処では Legge の説に従う。
5. Legge, *op. cit.*, p. 120.
6. Leach, *op. cit.*, p. xcviii.
   12-line stanza, tail-rhyme のロマンスには *Sir Eglamour of Artois*, *Athelston*, *The Earl of Toulouse* 等がある。
7. AN の綴りは Amilun。
8. ME では douke (duke) 公爵，AN では counte (count) 伯爵となっている。
9. AN はこの個所が異なる。決闘に勝った Amilun が主君の姫と婚

姻の式を挙げようとする時に天の声が聞こえて来る。

10. ME では公爵の息女は Belisaunt, AN では伯爵の息女は Mirabele で通称 Florie と呼ばれている。

11. ME の Owaines は12才になると Amorauntと 名を変える。 AN は Owein が本名であるが，通称は Amiraunt であるとしるしている。彼は AN では或る伯爵の子息で Amilun が養育した少年である。

12. W. P. Ker, *Epic and Romance*, Dover Publications Inc., 1957, p. 328.

13. Roman Courtois に関しては see L. Cazamian, *A History of French Literature*, Oxford Univ. Press, pp. 19 ff.

14. Cornelii Taciti, "Germania," *Opera Minora*, Oxford Univ. Press, 1952, pp. 311 ff.

15. Leach, *op. cit.*, p. lxix-lxx.
and see also; William A. Stowell, "Personal Relationships in Medieval France," *P. M. L. A.* xxl. No.3. pp. 388 ff.

16. Roman Courtois の典型的な *Sir Gawain and the Green Knight* にも 'gode Gawan' (*l.* 107, l. 2491) とか 'Gawan þe hende' (*l.* 405) とか OE 風の形容がみられる。

17. Ker, *op. cit.*, pp. 51 ff.

18. Wace の Anglo-Norman *Le Roman de Brut* を Middle Englih に訳した Layamon の *Brut* も会話体が多く，物語はそのためもあって Wace の15000行は Layamon の32240行に増大している。

19. Sir Israel Gollancz, *Sir Gawain and the Green Knight*, Oxford Univ. Press, (E. E. T. S.), 1964, pp. 44 ff.

20. Leach, *op. cit*, pp. lxxiv-lxxviii.
King Horn ca. 1250の Rymenhild も北方タイプの wooing lady である。

21. see "The Battle of Maldon" in Elliott Van Kirk Dobbie, ed., *The Anglo-Saxon Minor Poems*, Columbia Univ. Press, pp. 7—16

参考書目

1. Arnold, Ivor, d., *Le Roman de Brut de Wace*, Société des Anciens Textes Français, 1934.
2. Bedier, Joseph, ed., *La Chanson de Roland*, Piazza, 1964.
3. Cazamian, L., *A History of French Literatare*, Oxford Univ. Press, 1960.
4. Cohen, Gustave, *La Grand Clarté du Moyen-Age*, Gallimard, 1945.
5. De Vreis, Jan, *Heroic Song and Heroic Legend*, trans. B. J. Timmer, Oxford Univ. Press, 1963.
6. Dobbie, Elliott Van Kirk, ed., *The Anglo-Saxon Minor Poems*, Columbia Univ. Press, 1958.
7. Everett, Dorothy, *Essays on Middle English Literature*, Oxford Univ. Press, 1955.
8. French, Walter Hoyt and Hale, Charles Brockway, ed., *Middle English Metrical Romances*, Russell & Russell. Inc., 1964.
9. Gollancz, Israel, ed., *Sir Gawain and the Green Knight*, Oxford Univ. Press, E. E. T. S., 1964.
10. Hofmann, Konrad, ed., *Amis et Amiles und Jourdains de Blaivies*, Erlangen, 1882.
11. Ker, W. P., *Epic and Romance*, Dover Publications, Inc., 1957.
12. Klaeber, Fr., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, D. C. Heath and Company, 1950.
13. Kölbing, Eugen, ed., *Amis e Amilun*, Heilbronn, 1884.

14. Leaeh, Mac Edward, ed., *Amis and Amiloun*, Oxford Univ. Press, E. E. T. S., 1930.

15. Legge, M. Dominica, *Anglo-Norman Literature and its Background*, Oxford Univ. Press, 1933.

16. Mc Knight, George H., *King Horn, Floris and Blaunchefluv, The Assumption of Our Lady*, Oxford Univ. Press, E. E. T. S., 1932.

17. Onions, C. T. *Sweet's Anglo-Saxon Reader*, Oxford Univ. Press, 1932.

18. Pope, Mildred K., *The Romance of Horn by Thomas*, Anglo-Norman Text Society, 1955.

19. Rychner, Jean, ed., *Les Lais de Marie de France*, Champion, 1968

20. Schofield, William H., *English Literature from the Norman Conquest to Chaucer*, reprint, Phaeton Pess, 1969.

21. Stowell, William A., "Personal Relationships in Medieval France" *P. M. L. A.* XXI No. 3.

22. Taciti, Cornelii, "Germania", *Opera Minora*, Oxford Univ. Press, 1952.

23. Vising, Johan, *Anglo-Norman Language and Literature*, Oxford Univ. Press, 1923.